

## 【報告】

短期留学生<sup>1)</sup>と国内学生の共修による DEI の推進小嶋 緑<sup>1)\*</sup>, 末松和子<sup>1)</sup>, 渡部留美<sup>1)</sup>

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター

本稿は、2022年度東北大学高度教養教育・学生支援機構教育開発推進経費の助成を受けて取り組んだ、授業開発のための研究活動に付随して生じた試行的授業実践とその結果に関する報告である。実践では、短期受入れプログラムに参加する留学生と国内学生を対象としたセッションにおいて、多様性、公正性、包摂性 (DEI) をテーマとしたセッションを行った。DEI を取り扱う場合、出身国が多様な留学生たちの存在自体が多様性に富んだリソースとなり得る。参加者からのパイロット・インタビュー調査の結果、短い接触であっても、マイノリティに関する社会課題について多様な視点から見つめることが価値基準の相対化につながっていること、英語で社会課題を議論するという貴重な機会になっていること、大学の取り組みを学生に知らせることの重要性などが示された。

## 1. はじめに

近年、日本の高等教育機関において、「多様性 (Diversity)、公正性 (Equity)、包摂性 (Inclusion)」(以下、DEI) が推進されている。多くの大学でセンター等の新規設置や改組が見られ、マイノリティに対するガイドラインを新たに設定する動きも広がっている。東北大学は「門戸開放」を開学の理念とし、1913年に日本で初めて女子学生を受け入れた大学として知られる。2001年に全国に先駆けて男女共同参画委員会を発足して以来取り組んできた男女共同参画の活動を継承しつつ発展させる形で、2022年4月にDEI推進宣言を発出、続く2023年にはDEIセンターを設立し、ジェンダー・パリティやDEIなキャンパスの実現に向けて様々な取組を行っているところである<sup>2)</sup>。多様化する学内コミュニティにおいて、構成員のDEIに対する理解を深化させ、誰もがマイノリティであることを理由に取り残されない環境の整備が進められている。

他方、東北大学はカリキュラムの国際化の要として、国際共修を手法とした教育実践を正課科目に取り入れ展開してきた。背景の異なる留学生と国内学生が学ぶ国際共修授業には様々な形態があるが、多くの場合、

授業に参加する学生自体が多様性に富んだ集団を形成している。本実践報告では、この既にある集団の多様性を国際共修のリソースとして活用しながら、学生たちのDEIに対する理解を深める授業の在り方を検討する。

## 2. 問題関心と先行研究

Leaskはカリキュラムの国際化 (Internationalization of curriculum) を「国際的、文化間的側面をカリキュラムの内容および教育学習設備、学習プログラムの支援サービスに組み入れること」と定義した。そのアプローチは、①国際的な内容自体が主となるカリキュラムの構築によって学生の国際感覚醸成を目指すもの、②伝統的あるいは従来型の科目に国際的視点を組み入れ科目修得内容の拡張を目指すもの、③授業手法の工夫により学生の国際性スキルの涵養を目指すものに分類が可能で、これらがカリキュラムの中外で、相互に関連し合いながら設計されるという (Leask, 2009) (米澤, 2017)。

他方、東北大学における国際共修は、留学生と国内学生が共に学ぶことに重きを置いた、大学カリキュラムの国際化における鍵となる、特徴的な授業形態を持つ科目群である。末松 (2019) では、国際共修は「意

\* ) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 midori.kojima.e8@tohoku.ac.jp  
投稿資格: 1, 7

見交換、グループワーク、プロジェクトなどの共同作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ（考察・行動力）やコミュニケーションスタイルから学ぶ。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる「正課内外活動」と定義されている。これまで、様々な実践や効果の検証などの研究が蓄積されてきており、“多様性の尊重”は学習効果の一つとして示されている（加賀美、2006など）。末松（2019）の定義や蓄積された実践報告からは、日本における国際共修はLeaskの分類3の要素が強いものが多いように見受けられる。しかし、Leaskの分類2にあたるような、学習内容の修得や理解の促進を第一の目的とした国際共修の実践に関する研究は少ない<sup>3)</sup>。そこで本報告では、DEIに対する理解の深化を目標に設計された単発の国際共修セッションにおいて、どのような教育・学習活動が効果的な影響を与えるのか、学習者は多様な他者との接触を通じてどのような気づきや学びを得ているのかを明らかにすることを目的とする。セメスター単位の正課国際共修科目ではなく、単発のセッションを研究対象にするのは、国内学生にとって参加へのハードルが比較的低い国際共修の機会と考えられるからである。以上により、国内学生や留学生のDEIに対する理解を深め、DEIなキャンパス、そして社会を創造していくことに寄与する。

### 3. 授業実践

筆者は日本語及び日本文化学習の短期留学生 受け入れプログラムにおいて、DEIをテーマとした国際共修のセッションを企画し、実践した。同短期プログラムはTohoku University Japanese Program（通称TUIJP）と呼ばれ、2013年から東北大学グローバルラーニングセンターが主に協定校の学生向けに開催している2週間から4週間のプログラムである。2020～2021年度の新型コロナウイルス感染症流行期はオンラインでの開催となったが、2022年度より段階的に対面開催を再開し、2023年度は対面のプログラムとオンラインのプログラムが併存している状態である。2023年10月現在、特に対面プログラムが人気で、定員に対して2、3倍の応

募となっている。図1は2023年夏に実施したコースの修了式直後に、参加者の同意を得て撮影した様子である。



図1 修了式後の集合写真（2023夏）

本実践は、同プログラム期間中の1コマ90分を利用して行った単発の国際共修セッションである。正課の国際共修科目を開発するにあたって、パイロットとして活用してみたところ、参加した学生から集めたりフレクションの反応が良かったこと、短期プログラム運営サイドで提供可能なコンテンツを探していた事情も相まって、その後短期受け入れプログラムの度に最低1コマで国際共修DEIセッションを実施する流れとなり、現在も引き続き提供している。当初はコロナ禍が継続していたため、セッションの実施形態も同様にオンラインと対面が併存する形となった（表1）。

セッション参加者は、主に東アジア、東南アジア、北米、ヨーロッパの協定校からのTUIJP受講生とそのバディである国内学生である。バディとは、東北大学に所属する学生がボランティアとして行う国際交流の制度で、短期留学生にとっての日本での友人的存在として、週に最低1回の交流を義務付け、文化や学生生活などの話題で異文化間コミュニケーションを行うことになっている。受講生と国内学生のバディはこのセッションまでにコミュニケーションを取っている前提であり、グループディスカッションの班分けの際は、なるべく優先的にバディのペアを同じ班にした。プログラム規模が大きい場合は受講生を日本語レベルでクラス分けするが、その場合でも本セッションは合同で実施している。

表1 DEI国際共修セッション開催実績

No.	時期	実施形態	言語	テーマ	受講生の参加
1	2022年12月	オンライン	英日混合	ジェンダー・ギャップ	5名
2	2023年2月	オンライン	英語	ジェンダー・ギャップ	3名
3	2023年3月	対面	英語	ジェンダー・ギャップ	23名
4	2023年5月	オンライン	英語	ジェンダー・ギャップ	4名
5	2023年6月	オンライン	英語	ジェンダー・ギャップ	6名
6	2023年7月	対面	英語	セクシャル・マイノリティ	47名

※各回にTUIJP受講生の7～8割程度数の東北大学バディ学生が出席した。

セッションでは、DEIの概念についての基本知識、日本におけるマイノリティ、東北大学のDEIの取り組み等を冒頭に提供したうえで、特定のマイノリティ課題を選び、当該回のテーマとして取り扱った。具体的には、日本でも近年関心が高まるジェンダー・ギャップとセクシャル・マイノリティをこれまでに扱った。

セッションの流れとしては、当該マイノリティに関する基本知識を提供し、具体的情報として人口・社会統計等を用いながら課題の存在を示し、そのうえで感じたことの共有や、課題の背景にある人々の意識や社会構造などについて考察する3～4回のグループディスカッションを行った。また、受講生の出身国や地域の状況についても紹介するよう推奨した。各ディスカッションの後はクラス全体で議論内容を共有するとともに、問いに対する解や参考になるような情報、視点を提供した。なおテーマによっては、議論を行う上での留意点を事前にアナウンスし、当事者学生にとって安全な学習環境となるよう配慮した。

米国で留学生が異文化学習とコミュニケーションのリソースであることをいち早く指摘したメステンハウザーは、学生間の異文化交流を促進することとして、「①授業担当教員がファシリテーターとしての役割を担うこと、②グループワークやペアワークなど、複数回の交流の機会を設けること、③グループで取り組む課題を与えること、④成績評価の項目に、授業参加だけではなく、授業内での異文化交流の度合いを考慮すること、⑤言語が最大の阻害要因となりうること」という調査結果を示している（秋庭・水松，2019）。本実践では、単発セッションということを踏まえ、①と②を重視した。また⑤の言語課題が大きにならないよう、ディスカッション時には日英二言語の使用を可とした。

ディスカッションのグループ分けにおいては、学生の国籍と在籍大学及び性別のバランスを重視した。可

能な限り経験が異なる参加学生同士が同じグループで学び合えるよう事前に調整した。そうすることで、例えば4人のグループであっても5か国の事例が集まるなどの利点があった（図2）。

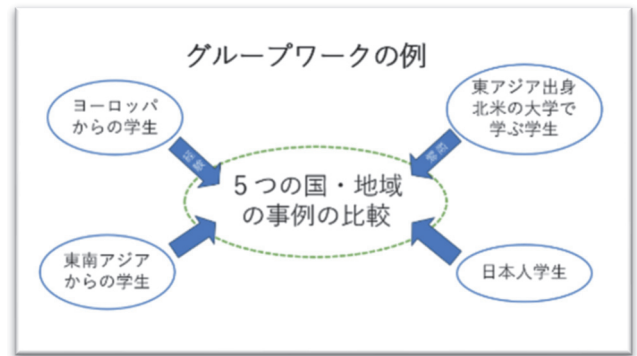


図2 グループワークの例

参加学生からは毎回振り返りフォームの提出を義務付け、書かれた内容を次回以降の参考としてきた。振り返りの内容は、研究協力の同意を得ていなかったためここでの引用を控えるが、初めてテーマについて議論したこと、日本のマイノリティが置かれた状況への驚き、他国の実態を知った感動、内省へのつながりなどが記述された。初期の数回のフィードバックから浮かび上がったことは、短時間の国際共修であっても、DEIの学習内容の導入にきっかけとして重要な意味を持つのではないかという仮説であった。

Australian Learning and Teaching Council（以下、ALTC）が支援をして行われたFinding Common Ground プロジェクト（以下、FCGプロジェクト）の結果で示された、多文化背景からなる学生間交流の3つの利点の1つとして、「異なる観点への気づきと理解が増す」（ALTC，2010）（米澤，2017）ことが示されている。そこで、多様な背景を持つ参加者集団自体を資源とする仕掛けを取り入れることで、DEIに対する理解の深化や、社会問題に対する気づきを引き起こすことに貢献できる可能性の検証に向けて、探求的なパイロット・インタビューを行うこととした。

#### 4. パイロット・インタビュー

2022年12月から2023年8月にTUIJPバディとしてDEI国際共修セッションに参加した国内学生のうち、協力を



申し出てくれた3名の1～2年生の日本人学生を対象にパイロット・インタビューを実施した。研究協力者の属性は表2の通りである。研究倫理申請を経て、2023年9月下旬に対面またはオンラインで各30分程度の半構造化インタビューを行った。研究利用の旨説明し、同意を得たうえで事前に準備した質問を用いながら、被験者の回答状況に応じて適宜質問を追加した。インタビューでは主にセッションでの学びや気づき、他の類似科目との比較、受講後の変化などについて聞き取った。

表2 研究協力者一覧

協力者	性別	学部	学年	海外経験	国際共修履修経験	参加回
A	女	工学部	2年生	あり(短期在住)	あり(英語科目)	表1 No.1
B	女	法学部	1年生	あり(短期留学)	あり(英語科目)	表1 No.5
C	女	農学部	1年生	なし	なし	表1 No.6

## 5. 結果と考察

### 5.1 社会制度や視点の相違

今回はサンプル数の少ないパイロットであったため、厳密な分析手法を使わずに、問いや仮説に関する語りや特徴的な語りに注目して内容を抽出、書き起こし、考察した。留学生とのディスカッションがどのように学習内容の理解を助けたかを聞き取る中で、まず大きな点として、議論の前提となる各国の状況、社会制度を含めた視点の違いについて研究協力者全員が触れた。

[A] やっぱり海外学生とディスカッションすることで、それぞれの国の状況とか、そういうのを知って、そこを比較できるんで、そこはやっぱり、ディスカッションの内容としても全然違うとは思います。その、日本人学生だけのディスカッションと比較して、  
(中略)

経験とか、その、制度とかも、やっぱり違うので、そこで新しい発見とか、日本人学生の中だと、まあ同じ制度なので、そこを踏まえた上での議論なんですけど、海外学生だと、そこまで比較なので。

[B] 日本人だけとか留学生の方だけっていう授業よりも、お互いが置かれている状況から発言することで、なんか見え方が違うっていうか、問題に対していろんな視点が持てたんじゃないかなっていうのと、

あとやっぱり国内の学生がいることによって、日本の現状をより伝えられたかなっていうのはあります。

[C] 知りたいです、いろんな国の状況を。やっぱり日本人の友達だけだと、日本の見方でしか見れないと思うんで。

日本人学生同士で社会課題を取り扱うと、まず前提として現在の日本の社会制度を踏まえたうえでの議論になるが、国際共修であると、その前提から異なり、議論の視点が多様になることが全員に共通して述べられている。この結果は、前述のALTC(2010)によるFCGプロジェクト調査結果で示された利点の1つ「異なる観点への気づきと理解が増す」と合致する。

更に、これらの学生の気づきは、意識せずに身にかけている価値観の問い直しにまでつながる可能性があることが示された。Cは次の発言のように、ディスカッションで他国の状況を知り、これまで疑問を持つことのなかった自国の制度と自身の価値基準を問い直し、考えを変化させていた。

[C] 日本と海外のヘイトクライムの扱い方? こんなんにも違うんだなと思って、もっと日本はここを見習うべきなんじゃないのかな、みたいな。新しい、自分が今まで当然だって思ってたことが、海外では違う扱われ方をしてて、あそっちの方がいいな、みたいな。そういうのが、海外の状況を知れたのが良かったです、っていうのが一番印象に残ってますね。

Aの場合も、自覚的には語られなかったが、価値観の問い直しにつながるような強いインパクトを経験していた。

[A] ジェンダーに関して、その、海外の学生は、結構ストレートにいろいろこうディスカッションするけど、日本は、その、あまり話さないというか、ちょっと恥ずかしい感じなので。違いとしてあるっていうのがわかったし、そこが結構一番印象的だったかなって思います。

後ほど確認したところによると、この語りの中の「ジェンダー」は「性 (sex)」を意味しており、西欧人留学生の国では性がオープンかつ頻繁に話題にされることを知り、非常に驚いたことを共有してくれた。これは性の話題をタブー視するという日本女性の規範意識や性の二重基準への気づきにつながる可能性を示唆している。

これらの語りから明らかになったのは、様々な国や地域から来た学生とDEIという社会課題を議論することは、自分の生きてきた社会の在り方や自身の価値基準を相対化するきっかけを提供し、社会制度や社会規範に普遍性はなく、様々な形態・選択肢があり得ることへの気づきにつながるということである。それはすなわち、自分自身が無自覚に身に着けてきた規範意識や疑うことのなかった前提を問い直すということにもつながり得る。

## 5.2 社会課題を議論すること

今の大学一年生がどの程度グループディスカッションに慣れているのかという質問に対して、Bは次のように語った。

[B] ああ、慣れてないような気がする。やっぱりコロナが高校時代とかぶってるていうのがあるので、自分の意見を言うっていうの、グループ活動でなんかプレゼンテーション作っていく中で意見を言うぐらいのレベルでしか無いんじゃないかな。

(中略)

それこそ(大学の短期留学プログラム)の時は、ジェンダーに関しても思ったんですけど、環境問題とか、そういう教育問題っていうのはけっこう、あなたたちどう思う?みたいな感じであったので。

(中略)

まだ受け身の授業が多いのかなっていうのが、学部で授業がすべてそうだったので。

Bは新型コロナウイルス感染症の蔓延が高校3年間と重なった学年であり、今回の結果が世代に特徴的な反応だった可能性もあるが、語りから読み取れるのは、現在の大学1年生には社会課題あるいは政治的な話題を正面

から議論するという経験に乏しい層があり、DEI国際共修という特別な場はその訓練を半ば強制的に提供する装置となり得るということである。一般に欧米の若者は日本の若者に比べると政治への関心が高いと言われる(内閣府, 2019)。また、最大でプログラム参加者3割程度を占めることがあった台湾の若者も、国政選挙への投票率の高さから<sup>4)</sup>政治参画への意識が高いことで知られる。語りでは直接的に言及されなかったが、それらの差異の大きな他者とのディスカッションは、気づきにつながりやすいという可能性もある。

## 5.3 社会課題を英語で議論すること

CはBと同じ1年生であるものの、社会課題に関する考えを発言すること自体には抵抗がなく、それよりも英語で社会課題を議論することの難しさを強調した。

[C] 結構なんて言うんだろう、真剣な話というかその、シビアな話というか。っていう内容だったので、英語がすごい難しくて、全然伝わらなくて。

(中略)

(真面目な話をすること) それ自体は全然抵抗なくて、むしろ友達とかと話してても、こうなんか話の流れでそういう話になることもあるんで、なんですけど、英語ってなると言葉にもいろいろあるじゃないですか。(中略) そういう言葉の選び方がすごい難しくて、違いがわからない上に、何を使っているかわからない。やっぱ日本語だと自分が言いたいこと、好きなだけ言えるけど、英語だと難しいなみたいなのがあって、ちょっと、やっぱ、うーん英語でそれをするのはやっぱ難しかったですね、結構。

Cの場合、参加回のテーマがセクシャル・マイノリティであり、大学までに授業を受けたことがあった。テーマの違いが課題に関する議論経験の有無につながっている可能性はある。

Cはさらに、留学生たちが英語の苦手な自分の発言の内容を重視し、しっかりと聞く姿勢を示したことに対して感銘を受け、そこから英語の文法や語彙の正しさよりも、伝えようとするのが大切だという学びを得ていた。

[C] だけど、私がすごい頑張って英語を話しているのを留学生の方はすごい真剣に聞いてくれて、「ゆっくりで大丈夫だよ。」それがすごい嬉しくて、あなんか、英語で話すの、そんな難しい、っていうか、そこまで大きなことじゃないんだな、みたいな。失敗してもいいから話してみようっていう気持ちになれたのはすごい大きいです。(中略) とりあえず伝えようみたいな、そういう精神になりました。ちょっと強くなったのかなって感じします。

ここではCが英語による社会課題の議論という困難に直面しつつも、寛容な他者の存在が助けとなって自分なりに対応できたこと、それが自己変容の実感につながっていることが示されている。Cは他の授業や授業時間外でもバディ留学生らと積極的に交流をしてきたのだが、この語りからは、社会課題であるからこそ英語議論の難しさがあることがわかる。これは海外渡航や留学経験のないCが、国内で実施した国際共修の中で海外留学での異文化環境と同様の学びを得ているともいえる。

#### 5.4 大学の取組

国際共修であることとは直接的にかかわらないが、大学が行うDEI推進の取り組みを知った喜びを語る研究協力者もいた。Bはもともとジェンダー課題に興味を持っており、東北大学が日本で初めて女子学生を受け入れた大学であることや門戸開放の理念に共感していた。しかし、入学式で壇上に登った役職者が男性ばかりだった様子を見て引っ掛かりを覚えていたという。それが今回、DEI推進宣言を掲げて具体的な取り組みを進めていると知り、嬉しさを感じると同時に、まだ追いついていない実態への疑問を語った。

[B] この国際共修は単発だったんですけど、参加したことでより一番自分に近かった東北大学での取り組みを知ったっていうのは、すごいなんか大きなきっかけになったなって。

(中略)

関心があってっていうのもあって、その、最初パンフレット見た時すごい嬉しくて。あ、自分が行きた

いところってやっぱり、あ、こういうところだってすごい嬉しかったんですけど。入学式にそれ(男性役職者ばかりである状況)を見て、高校時代の同級生のお母さんが、もっと「(女性活躍の重要性を)言ってるけど、(実態は女性が)少ないじゃん」って。

Bの語りが示唆するのは、大学が推進する各種DEI推進の取り組みは、大学生生活の日常では見えにくいこと、マイノリティ当事者は、大学が課題解決に向き合う姿に好意的な反応を示すという可能性である。詳しい検証が必要だが、これらが多くの在學生に該当するならば、現行の一般向け広報に加えて在學生により積極的に取り組みを周知することを検討する意義があるだろう。それがマイノリティ当事者に大学としての包摂の姿勢を見せることにつながり、当事者の取り残される感覚を低減する可能性がある。

#### 6. まとめ

本稿では単発の国際共修セッションを通して、短期留学生、国内学生のDEIに対する理解の深化を促す授業実践を取り扱った。パイロット・インタビューの結果を踏まえながら、学習内容に対する理解を深めるために国際共修を活用する、留学生をリソースとして活用するという視点を掘り下げた。その結果、多様な背景を持つ参加者集団自体を資源とする仕掛けを取り入れることで、学習者の気づきや学びを引き起こすことに貢献できていることが示された。とりわけ社会制度や社会規範の相対化や、社会課題を多様な他者と議論する経験の価値、言語を超えて議論することの難しさへの気づき等が語られたことは、今後の授業開発に示唆を与える。DEIの推進は、経験や立場の違いによる価値の対立などが生じ得る論争的な課題でもあり、学習対象に関する知識を得ることはできても、社会制度や実践に正解があるわけではない。そのため、大学コミュニティや社会は、多様な構成員や市民とともにより良い在り方を模索していくしかない。その点からも、自分とは異なる背景を持った他者と国際共修で議論するという経験を通じた制度や価値基準の相対化に、最初の一步としての意味があるのではないだろうか。

他にも、短期受け入れプログラムの学生と単発の国



際共修を行うことの意義として、カリキュラム上の事情で留学やセメスター単位の国際共修科目の履修、継続的な国際交流活動への参画等が難しい国内学生に対し、国際的な学びの機会を提供できるという点などがある。教育的効果は限定的でも、気づきを与える導入として実施する意味は大きい。

他方実践を通して、単発のDEI国際共修の困難も見出された。まず、FCGプロジェクト（ALTC, 2010）でも指摘された通り、共通基盤の欠如は学生間交流を阻む障壁となる。そのため、議論に必要な基本知識を持ってもらおうとすると講義に割く時間が増え議論の時間を圧迫したり、情報過多になりがちというジレンマがある。また各マイノリティ課題以前に、DEIの1つ1つの概念が非常に広く深い議論や考察が可能な対象である。それらを1コマに収めるとなると、極めて表面的な内容にならざるを得ず、結果学生の理解も浅いものになりかねない。その点への留意を忘れず、より深く学べる参考文献の提示や正課科目への橋渡し、内省の促しなどの工夫が求められる。

パイロット・インタビューの限界として、サンプル数が少ないこと、日本人女子学生のバディに偏っていることが挙げられる。また、研究協力者はプログラム期間全体を通してTUIP受講生と関わっているため、この国際共修セッションだけの効果を切り離すことが難しいという側面もある。特に研究協力者AとBは、本実践でのバディ経験の前後で海外短期留学や正課の国際共修科目にも参加しているため、それらの経験が語りの内容に影響を与えている可能性は大いにある。理論や堅実な手法を用いた実証研究になっているわけではなく、パイロットの考察も仮説段階のものを含む。今後はこれらの限界を克服するようリサーチデザインで教育効果を実証的に検証していくこととしたい。

## 謝辞

本稿は東北大学高度教養教育・学生支援機構「2022年度教育開発推進経費（個人申請）」の助成を受けた「事業名：キャンパスのダイバーシティ、エクイティ、インクルージョンの実現に向けたプロジェクト型学習の開発 ～留学生の視点から見たキャンパス国際化～」の活動や授業実践を進める中で生じてきた追加的な問

に対する探求的かつ初期的な研究の成果報告である。初期から計画的に行った研究ではないため、時系列で記述した説明もあり、読みにくさがある点についてはお詫び申し上げる。

## 注

- 1) 本報告での短期留学生は、2～4週間程度の短期受け入れプログラムに参加する学生のことを指す。
- 2) 詳しくは「東北大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）推進センター」を参照。  
<https://dei.tohoku.ac.jp/>（閲覧 2023/10/12）
- 3) 例えば、高橋（2022）の国際共修を用いた人権教育の例などがある。
- 4) 例えば2020年総統選の投票率は20～30代のどの層でも70%を超える（自由時報, 2020）

## 引用文献

- 秋庭裕子・水松巳奈（2019）「多文化・他民族社会：アメリカ」, 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編『国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂, pp. 66-92.
- Australian Learning and Teaching Council. (2010) “Finding Common Ground: enhancing interaction between domestic and international students Guide for academics.”
- 自由時報（2020）「藍綠搶青年選票」年輕人投票率提升 蔡去年勝選關鍵」,  
<https://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/1432450>  
（閲覧 2023/10/12）
- 加賀美常美代（2006）「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか-シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合」, 異文化間教育学会学会誌編集委員会編『異文化間教育』第24号, pp. 76-91.
- Leask, B (2009) “Using Formal and Informal Curricula to Improve Interactions Between Home and International Students,” *Journal of Studies in International Education*. Vol. 13, 2.
- Leask, B (2015) “Internationalizing the Curriculum.” Routledge.
- 内閣府（2019）「令和元年版 子供・若者白書（全体版）」

特集1 日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～」,

[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/s0\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/s0_1.html) (閲覧 2023/10/12)

末松和子 (2019) 「はじめに」, 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編『国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂, pp. i-vi.

高橋美能 (2022) 「大学で留学生と国内学生が共に「人権」を学ぶ授業の効果: オンラインによる国際共修授業の実践」日本人権教育研究学会編『人権教育研究』第22号, pp. 51-62.

米澤由香子 (2017) 「Finding Common Ground プロジェクト—オーストラリアの大学における多文化間共修の理論枠組み」, 坂本利子・堀江未来・米澤由香子編『多文化間共修: 多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社, pp. 35-75.